



時を越える贈り物

今昔ものづくり

附属図書館の所蔵コレクションから、「ものづくり」にちなんだ資料を紹介いたします。所蔵資料を「もの」として眺めれば、そこは紙と本づくりの世界。一方、地域に目を配ればそこはまさに、ものづくり王国。資料の中で昔の職人たちにも出会っていきます。今は昔のモノづくりの物語。時を越えてお楽しみ下さい。



名古屋大学附属図書館2015秋季特別展

時を越える贈り物

今昔ものづくり

発行日 2015年10月17日

編集・発行 名古屋大学附属図書館・附属図書館研究開発室

〒464-8601 名古屋市中区千種区不老町B3-2(790) TEL: 052-789-3678(受付) FAX: 052-789-3694

<http://www.nul.nagoya-u.ac.jp> ©名古屋大学附属図書館

名古屋大学附属図書館2015 秋季特別展

10月17日(土)~11月5日(木)

9時~21時(土・日・祝日も開催)

名古屋大学中央図書館2階 ビブリオサロン

時を超える贈り物 今昔ものづくり

附属図書館の所蔵コレクションから、「ものづくり」にちなんだ資料を紹介します。

所蔵資料を「もの」として眺めれば、そこは紙と本づくりの世界になります。

一方、地域に目を配ればそこはまさに、ものづくり王国。

地元の製造業の文化を、所蔵資料を通じて遡ります。ものをつくる人々の世界にもスポットを当て、資料の中で職人たちに出会っていきます。

今は昔のモノづくりの物語。時を超えてお楽しみ下さい。

※資料名のあとの(文)(裁)(経)(経研七)(情文)はそれぞれ文学図書室、教育発達科学図書室、経済学図書室、国際経済政策研究センター情報資料室、情報・言語合同図書室の所蔵を示します。記載のない物は中央図書館所蔵です。

I

紙と出版

印刷技術が発達する以前、情報は人々の手で書き写すことで伝播していきました。その後、印刷技術や活字が発達することによって、人々に大量に情報が伝わることになります。写本から版本への移り変わり、また、紙がどのようにつくられたのかをご覧ください。

写本から活字へ

1.『さごろも』 書写者不明 [近世前期]

中世までは日本の書物のほとんどが筆写によって作られていた。これは「奈良絵本」と呼ばれる彩色写本で、金銀箔が用いられて美しい挿絵も描かれており、当時の書物のなかでも豪華なものに仕上げられている。



1.『さごろも』

2.『畫本獨けいこ』 歌川國負画 [江戸後期]

3.板木「清洲廊」 文政7年(1824)

4.『尾張廻家苞 5巻』 石原正明著 文政2年(1819) 序

名古屋の永楽屋東四郎という本屋によって出版された新古今集の注釈書。



3. 板木「清洲廊」

5. 覚 (唐詩選等代金受取書) 嘉永6年(1853) 高木家文書

名古屋の本屋の永楽屋が作成した書籍の代金受取書。江戸時代の本屋は、出版と販売の両方を行っていた。

6.『古文舊書考 4巻』 島田翰著 明治38年(1905)

幕末になると西洋から活版印刷の技術が取り入れられて日本でも金属活字が製作され、活版印刷が行われるようになった。明治時代の中頃までは日本の伝統的な装丁で活版印刷により作られる本もあった。

紙づくりの歴史

7.『日本の紙』 毎日新聞社手漉和紙委員会編 昭和51年(1976)

8.『天工開物 3巻』 宋應星著 江田益英校訂 明和8年(1771)

9.『紙漉重寶記』 [複製] 國東治兵衛撰 丹羽桃溪画 大正14年(1925)



9.「紙漉重寶記」

II

地元のものづくり

東海地方で古くから伝わるものづくりの伝統の中から、「やきもの」「醸造」「自動車」「刃物」に関する資料を集めてみました。

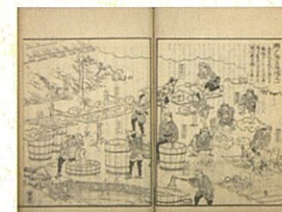
やきもの

古墳時代中期以降、この地方では須恵器、灰釉陶器、山茶碗などが生産され、現在でも陶器の一大産地となっています。もともと瀬戸で作られたやきものを指す言葉であった「瀬戸物」が、産地があまりにも有名であったために、いつしか、広くやきものを指す言葉にもなったぐらいです。

10.『尾張名所圖會』 岡田啓(文圖), 野口道直(梅居)全撰;

小田切忠近(春江)圖畫 明治6年(1880)

江戸末期から明治初期にかけて刊行された尾張国の地誌。尾張国八郡の名所が描かれた。



10.「尾張名所圖會」

11.『日本の陶器』 Augustus W. Franks著 1906年

Japanese pottery : being a native report with an introduction and catalogue Sir Augustus W. Franks 1906

12.『天工開物 3巻』

宋應星著 江田益英校訂 明和8年(1771)

明の末期、1637年(崇禎10年)に刊行された産業技術書を江戸中期の文人、木村兼葎堂(きむらげんかどう)の所蔵本をもとに訓点と送り仮名で校訂し刊行した。農産物や衣料・生活用具などの生産技術の紹介は元より、生活に密着した技術を重視した点が特色である。



12.「天工開物」

13.『瀬戸市史』

資料編5 近現代1 付録 瀬戸市史編纂委員会編 昭和4年(1929)頃

輸出陶磁器の輸送にも活躍した大正期の瀬戸電鉄(現:名鉄瀬戸線)沿線の観光案内図。

14.『日本陶窯史; 瀬戸系統篇巻2』昭和7年(1932)

名古屋大学構内および近郊の猿投窯からの出土物(文学部・文学研究科 考古学研究室蔵)

15.東山114号窯出土資料 一式

16.東山61号窯出土資料 一式

17.折戸23号窯出土須恵器 2点

18.折戸9号窯出土須恵器 1点

19.黒笹35号窯出土須恵器 1点

20.井ヶ谷67号窯出土須恵器 1点

21.黒笹90号窯出土灰釉陶器等 4点

22.黒笹89号窯出土灰釉陶器 1点

23.折戸53号窯出土灰釉陶器 1点



*東山114号窯発掘調査報告書、東山61号窯発掘調査報告書は名古屋大学 学術機関リポジトリより内容をご覧いただくことができます。
(<http://ir.nul.nagoya-u.ac.jp/jspui/>)

醸造

愛知県を中心とした濃尾平野では、昔から米や大豆や小麦などが多く作られてきました。

また、木曾三川を水源とする良質な水や三河(吉良)で作られた塩など、地元産の原料を使って、独自の醸造文化を發展させて来ました。三河の味噌、半田の酢、知多の酒・醤油などはその一例です。展示では、時代を遡り、文献に見られる日本の醸造の歴史、地元の醸造産業に関連する資料を展示します。

24.『倭名類聚鈔』源順撰 寛文11年(1671)

和名類聚抄は、平安中期の漢和辞書。承平4年(934)頃の成立。所蔵本は伴信友書入本等をもとに[神谷]三圓による詳細な書き入れ(朱筆・墨筆・青筆・茶筆)あり。



24.「倭名類聚鈔」

25.『和漢三才圖會』105巻 寺島良安著 正徳5年(1715)(教)

江戸時代の図解入り百科事典。和漢の事物を収容し、平易な漢文で各事物に簡明な説明と図を入れている。その明解、正確さによって発行から約200年間、明治時代に至るまで広く実用された。

26.『群書類従』巻第364: 厨事類記 檢校保己一集 文政3年(1863)

27.『百科全書』第15巻 1770

Encyclopédie, ou Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers, par une société de gens de lettres デイドロ(Diderot, Denis, 1713-1784)、ダランベール(Alembert, Jean Le Rond d', 1717-1783)を中心に編纂されたフランスの百科事典。

28.『廣益國産考』第5巻 天保15年(1844)(経)

日本各地の工芸作物の栽培を奨励し、特産品としての發展が農家を豊かにすると述べている。

29.『萬金産業袋』三宅也來撰述(江戸後期)

30.『醤油醸造法』高木家文書

31.『醤油精造現品買入帳』明治21年(1888) 河村家文書

32.『醤油売上帳』明治21年(1888) 河村家文書

33.『尾張名所圖會』[複製] 附録四 若山善三郎編 昭和5年(1930)

34.小栗風葉『亀甲鶴』新小説 1年7号 明治29年(1896)(情言)

作者の小栗風葉は、明治-大正期に活躍した半田出身の小説家。亀甲鶴は、明治29年に「新小説」に発表された。酒蔵を舞台に描かれ、当時の知多の酒造りの様子が詳細にわかる。

35.『粕酢醸造論』西村寅三著 明治36年(1903)

36.『知多商工案内』知多商工會議所編 昭和5年(1930)(経研セ)

37.『大日本麥酒株式會社三十年史』濱田徳太郎編輯 昭和11年(1936)(経研セ)



28.「廣益國産考」

自動車

20世紀は「自動車の世紀」とも言われ、自動車の普及と自動車産業の勃興は人々の暮らしや、産業の成り立ちを大きく変えました。日本の世界の中での位置づけも、自動車産業により大きく変わったといえるでしょう。

19世紀、黎明期の蒸気自動車を紹介する資料から始め、我が国の自動車技術や産業の發展を感じとれる、主に戦前の資料を選びました。自動車王国の先駆けとも言える地元企業の熱い取り組みや、自動車に関わった人々の豊かな人的交流も資料から感じていただければと思います。

38.『一般道における蒸気車の移動に関する論文』Alexander Gordon 著 1832年

An historical and practical treatise upon elemental locomotion, by means of steam carriages on common roads... Alexander Gordon 1832

著者のAlexander Gordonの父親David Gordonは1824年に6脚の馬のような脚がある蒸気自動車を発案。本書はそのDavidの発明も含む蒸気自動車の開発史などを紹介している。

39.『内燃機関(熱機関)』内丸最一郎著 昭和6年(1931)(経)

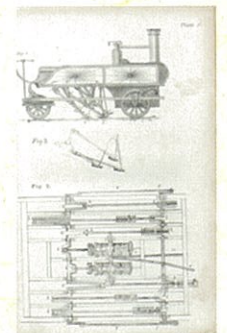
40.『平和記念東京博覽會審査報告』東京博覽會 大正12年(1923)(経)

平和記念東京博覽會は、大正11年に約5か月間、上野公園で開催された博覽會。外国の自動車に加え、国産自動車も8台が出品された。

41.『中部日本の自動車運輸』名古屋鐵道局編 昭和5年(1930)(経研セ)

42.隈部一雄「國産自動車及自動車部分品竝に自轉車に就て(自動車 自動自轉車 自轉車)」

機械學會誌. 1931, vol. 34, no. 166, p. 227-253.



38.「一般道における蒸気車の移動に関する論文」

43.平井榮一「國産乗用車あつた號の性能」
名古屋商工會議所月報. 1932, 290, p. 19-21 (経研セ)

44.梅原半二「自動車ラヂエーターの放熱板に就いて」
機械及電気:理論・實際. 1937, vol. 2, no. 11, p. 37-45

45.小林明「内燃機関用新空気が動力計」
内燃機関. 1938, Vol. 2, no. 10, p. 2-6

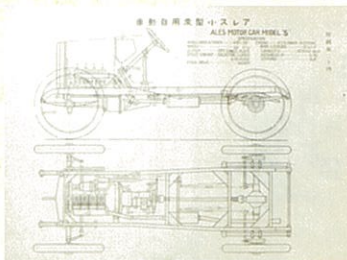
46.豊田喜一郎「トヨタ自動車はなぜ製鋼工場を設けたか」
科学主義工業. 1940, vol. 4, no. 5, p. 102-107

47.「我自動車工業の進展:トヨタ拳母新工場所見」
内燃機関. 1939, vol. 3, no.5, 口絵

48.『自動車工作の基礎(技能者養成テキスト)』
日本技術教育協會 昭和18年(1943)(経)

49.『トヨタ技術』第1巻 昭和23年(1948)(トヨタ自動車株式会社蔵)

『トヨタ技術』は、トヨタ自動車の技術論文誌(現在の『Toyota technical review』)。創刊号の巻頭を飾る論文の筆頭著者は長谷川龍雄。長谷川はこの後、初代、2代カローラのチーフエンジニアとして、我が国のモーターゼーションを牽引するベストセラーカーを生み出すことになる。



40. 『平和記念東京博覧會審査報告』

刃物

岐阜県関市(美濃)は刃物の名産地として名高く、鎌倉時代に刀匠が移り住んで以来、その伝統技能は、現在まで脈々と受け継がれてきました。

本学所蔵の高木家文書にも、美濃名産としての刃物に関わる資料が何点か存在し、刃物が当時の美濃においてどのような位置づけであったかを感じ取ることができます。また、美濃の刀匠たちの銘を見ることができる、江戸時代の刀剣研究書についても紹介します。

50.『藤牧又左衛門宛青木七郎書状(修理よりの在所小刀につき礼状)』高木家文書

51.『藤牧又左衛門宛青木七郎書状(修理参府に際し在所小刀下賜につき請書)』高木家文書

52.『御参府ニ付御献上并諸向江之御音信覚帳』高木家文書

53.『刀剣目録』高木家文書

54.『古刀銘盡大全 9巻』仰木弘邦著 寛政4年(1792)

55.『本朝鍛冶考』鎌田魚妙撰 天保9年(1838)

江戸時代中期の刀剣研究家である鎌田魚妙による古刀の研究書。地域ごとの鍛冶の系図や、刃文、彫物等の図がみられる。



55. 『本朝鍛冶考』

56.『新刃銘鑑 6巻』神田勝久編 享保6年(1721)



資料の中の職人たち

現代のものづくりは、機械化、ロボット化が進み、必ずしも人が介在しないこともあります。しかし、昔はかならずヒト(職人)がいて、様々なものを生み出してきました。ここではそんな資料の中の職人たちと出会っていきます。

57.『群書類従』「本朝鍛冶考」巻第503巻上中下:七十一番歌合 文政3年(1820)跋

58.『東海道名所図会』寛政9年(1797)

東海道の名所旧跡や景勝地、産物を記した書物で、挿絵には街道沿いの土地で働く職人の姿も多数見える。

59.『東北院歌合』〔複製〕大正11年(1922)

60.『鑄物師職許状』正徳4年(1714) 真継家文書(文)

江戸時代の下級の公家(地下官人)の真継家に伝わった文書。真継家は諸国の鑄物師を統制・支配した。

61.『諸国鑄物師名寄記』文政11年(1828)~ 真継家文書(文)

真継家と関係のある各地の鑄物師の名簿であり、鑄物師職許状を受けた東北から九州の各地の鑄物師の名前等が記されている。

62.『公役雑録』正徳5年(1715)真継家文書(文)

63.『日本之下層社会』横山源之助著 明治32年(1899)

64.『當世風俗五十番歌合』

池邊藤園作歌及判語; 浅井黙語畫;

永井素岳詞書及浄書; 木村徳太郎(ほか)彫刻 明治40年(1907)

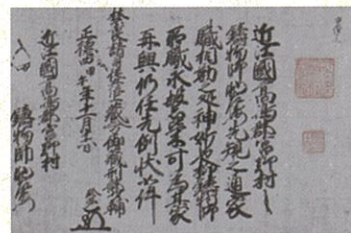
様々な職人が詠んだ和歌を競い合わせるという「職人歌合」の設定で作られている。ペンキ塗や製糸場の工女など明治時代の新しい業種の職人も描かれている。

65.『測量精密明治名古屋新圖』明治19年(1886)(教)

明治のころの名古屋の地図。職人に由来した地名が多くみられる。



58. 『東海道名所図会』



60. 『鑄物師職許状』



65. 『測量精密明治名古屋新圖』